

語用論・社会言語学研究の現状と展望

-2019・2020年における韓国国内の研究論文を中心に-

盧姪鉉*

〈Abstract〉

Current trends and prospects of studies on Japanese pragmatics and sociolinguistics

In this study, the trend of pragmatic theory and social linguistics research was examined, focusing on research papers published in Korea in 2019 and 2020. The results are as follows.

(1) In the area of contrast studies between Korean and Japanese and the study of Japanese as a national language/interlanguage, further diverse and qualitative data were adopted for the analysis, and findings of researches focusing on functions and actual conditions were continuously accumulated.

(2) The findings of mechanisms and model proposals in the field of Korean-Japanese contrastive research and the establishment of a corpus in the field of Japanese as a national language are remarkable achievements.

(3) In the area of Japanese education as a heritage language, researches were conducted to survey the students' ability to use, consciousness of, and the educational situation of Japanese as a heritage language, and were also expanded to the use and consciousness of the bilingualism of Korean residents in Japan, and further to the language policies, linguistic activities and language contact.

In other words, pragmatic theory and sociolinguistic research aimed to diversify and improve the quality of analysis data, and shed light on language phenomena in conjunction with society, by expanding the subject of research and continuously accumulating actual technical achievements. However, it remains regrettable that there is only few research results produced in the area of language behavior as a mutual interaction, research focusing on factor analysis, identification of mechanisms, and model construction. We look forward to future researches in these areas.

Field: Pragmatics, Sociolinguistics

Keywords: Pragmatics, Sociolinguistics, Contrastive Study Between Korean and Japanese, Japanese, Interlanguage

1. はじめに

* 徳成女子大 学校 グローバル融合大学 日語日文学専攻、副教授、社会言語学専攻

語用論と社会言語学は20世紀後半から現在に至るまで著しく成長してきた領域である。両者は互いに関連する話題を扱うことが多く、敬語をはじめ、発話行為、ポライトネスなどは、語用論と社会言語学の双方の関心事である。その中で、語用論(pragmatics)は、言葉の意味と話し手の意図を区別し、話し手が伝えたい意図を理解できるのはどうしてか、すなわち、言語表現とそれを用いる者や文脈との関係を研究する言語学の一分野である。例えば「寒くありませんか」という発話は、形式の上ではyes/no疑問文であるが、意図されている内容は寒いから暖房をつけてほしいという依頼としても捉えられる。このような現象が語用論の研究対象となる。語用論は1960年代の哲学者オースティンの発話行為の研究¹⁾から始まり、サールによる適切性条件の議論²⁾や、グライスによる協調の原理の解明³⁾によって一定の到達点に達した。その後、グライスの理論を批判的に継承したウィルソンとスペルベルによる関連性理論⁴⁾が展開されている。

一方、社会言語学(Sociolinguistics)は、社会の中で生きる人間、乃至その集団との関わりにおいて各言語現象あるいは言語運用を捉えようとする言語学の一分野である⁵⁾。研究対象は、言語変種、言語行動、言語接触、言語政策など多岐にわたる。例えば、話し手の生活する地域、性別、年齢、など様々な社会的要因との関わりから言語現象を見ようとするミクロなアプローチと共に、一言語を単位として、それを社会組織との関わりから考える(言語接触・言語政策など)マクロなアプローチもある。特に、ミクロなアプローチは、語用論と社会言語学のインターフェースに当たり、ミクロ社会言語学、相互作用の社会言語学、社会語用論などと呼ばれている。社会言語学は理論的考察の比重が少なく、個々の研究対象ごとに調査を行い、データを分析する研究の比重が大きい。

このような語用論・社会言語学の観点からの研究は、日本語学の世界においても活発に行われている。本研究では、2019年から2020年にかけて韓国国内で発表された研究論文を中心に、日本語学における語用論・社会言語学の研究動向について概観する。

2. 調査の概要

本研究では、2019・2020年における韓国国内の語用論・社会言語学研究の現状を把握するため、まず、韓国研究財団の学術誌引用索引サイト⁶⁾で「日本語と文学」に分類された登載学術誌(18種、2019・2020年発行本)から語用論・社会言語学関連の研究論文を抽出した。以下に、考察の対象とした学術誌とそこから抽出した語用論・社会言語学関連の論文数を〈表1〉に示す。

1) 坂本百大訳(1978)『言語と行為』、大修館書店 [John Langshaw Austin(1962), How to Do Things with Words, Harvard University Press]

2) 坂本百大・土屋俊訳(1986)『言語行為——言語哲学への試論』勁草書房[John Rogers Searle(1969), Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language]

3) 清塚邦彦訳(1998)『論理と会話』勁草書房[Herbert Paul Grice(1989), Studies in the Way of Words, HUP]

4) 内田聖二・宋南先・中達俊明・田中圭子訳(2000)『関連性理論—伝達と認知』研究社出版[Deirdre Wilson・Dan Sperber(1986), Relevance, Communication and Cognition, Blackwell]

5) 真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹(1992)『社会言語学』おうふう

6) <https://www.kci.go.kr/kciportal/po/search/poArtiSear.kci> [最終アクセス日: 2020.12.28.]

〈表1〉 調査対象とした学術誌と語用論・社会言語学関連論文数

No.	学術誌（発行機関）	論文数(%)
1	日本語学研究（韓国日本語学会）	22(17.8)
2	日本語教育研究（韓国日語教育学会）	16(11.9)
3	日語日文学研究（韓国日語日文学会）	13(9.6)
4	日本言語文化（韓国日本言語文化学会）	11(8.1)
5	日本文化学報（韓国日本文化学会）	10(7.4)
6	日本語文学（日本語文学会）	10(7.4)
7	日本語教育（韓国日本語教育学会）	9(6.7)
8	日本語文学（韓国日本語文学会）	9(6.7)
9	比較日本学（漢陽大学校日本国際比較研究所）	8(5.9)
10	日本近代学研究（韓国日本近代学会）	7(5.2)
11	日語日文学（大韓日語日文学会）	6(4.4)
12	日本学報（韓国日本学会）	3(2.2)
13	日本研究（韓国外国語大学校日本研究所）	3(2.2)
14	日本研究（中央大学校日本研究所）	3(2.2)
15	日本文化研究（東アジア日本学会）	2(1.5)
16	日本学研究（檀国大学校日本研究所）	1(0.7)
17	日本研究（高麗大学校グローバル日本研究院）	0(0.0)
18	翰林日本学（翰林大学校日本学研究所）	0(0.0)
合 計		135(100.0)

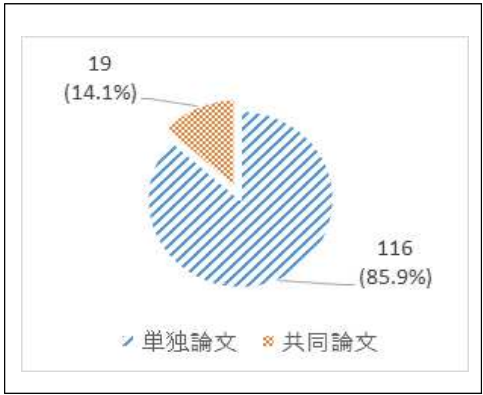
韓国研究財団の学術誌引用索引サイトで「日本語と文学」に分類された掲載学術誌(18種/2019・2020年発行本)に掲載された研究論文は、2019年に947本、2020年に849本、合わせて1796本であり、そのうち語用論・社会言語学関連は135本(7.5%)を占めていた。学術誌別の語用論・社会言語学関連の論文数を見ると、韓国日本語学会の『日本語学研究』に22本(17.8%)の論文が掲載されており、日本語学専門学術誌だけあって高い割合を占めている。

以下では、〈表1〉に示した語用論・社会言語学関連の研究論文(135本)を分析考察する。

3. 分析考察 - 語用論・社会言語学研究の現状と展望

3.1. 2019年・2020年の現況

2019・2020年における語用論・社会言語学研究は、氏名から判断して韓国人による単独研究が多いと見られる。



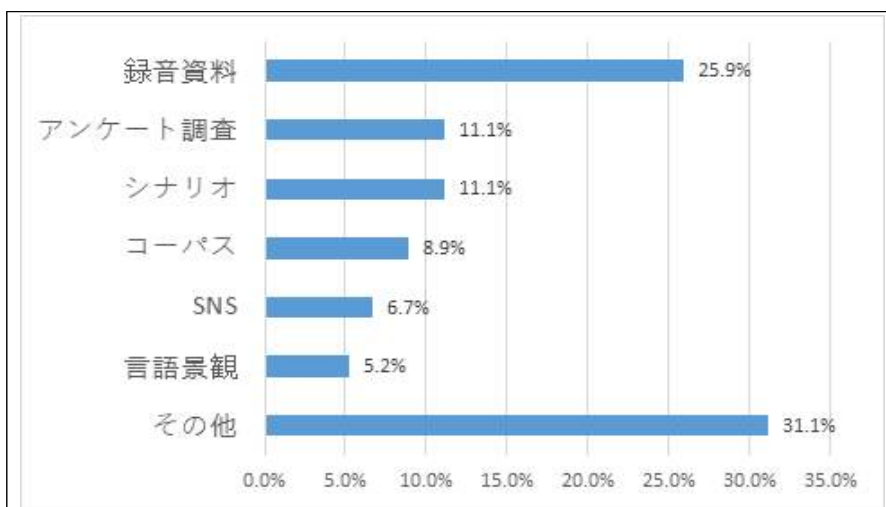
〈図1〉単独論文と共同論文の割合

〈表2〉論文著者の国籍分布

国籍	論文数
韓国人	101(74.8%)
日本人	15(11.1%)
韓国人+韓国人	14(10.4%)
韓国人+日本人	2(1.5%)
韓国人+中国人	1(0.7%)
韓国人+日本人+中国人	1(0.7%)
日本人+日本人	1(0.7%)
合計	135(100%)

語用論・社会言語学研究(135本)の中で単独論文は116本(85.9%)に達しており、共同論文は19本(14.1%)に過ぎない。19本の共同論文の中で「韓国人+日本人」が2本、「韓国人+中国人」「韓国人+日本人+中国人」「日本人+日本人」が1本ずつあり、残りの14本は「韓国人+韓国人」であった。また、語用論・社会言語学研究(135本)の中で韓国語と日本語との対照論文は、53本(39.3%)となっている。このような傾向は、2015・2016年の韓国における語用論研究・社会言語学研究の特徴として「韓国語と日本語との対照談話分析」という傾向を示した李吉鎔(2017)の結果、また、2017年・2018年の語用論・社会言語学研究(110本)の中で韓国語と日本語との対照研究が59本(53.6%)を占めていた洪珉杓(2019)の結果と比べると、若干減少したと見ることができる。洪珉杓(2019)にも指摘されているように、だれが、だれに、どこで、どんな状況で、どのような表現を使ったか、という言語運用上の側面に関心を寄せている語用論・社会言語学だけあって、「韓国人+日本人」の組み合わせによる共同研究や韓国語と日本語との対照研究は活性化していくのが望ましい方向であると考えられるが、現状はまだ程遠い。

一方、語用論・社会言語学の分野では、個々の言語・コミュニケーション現象についてデータを分析する研究が多い。2019・2020年における語用論・社会言語学の研究論文(135本)においても、言語データを分析した研究は126本(93.3%)にも達しており、分析資料は録音資料、アンケート調査、シナリオ、コーパスなど、多岐にわたっている。分析資料の種類は〈図2〉のとおりである。



〈図2〉語用論・社会言語学研究の分析資料の種類

〈図2〉から分かるように、分析資料は録音資料が一番多く、次いでアンケート調査、シナリオ、コーパス、SNS、言語景観の順である。その他には国会議事録などの検索システム、翻訳資料、討論番組、聞き取り調査、言語習得に関するテストなどが分析資料となっている他、教材と自然談話といった複数の資料を分析した研究も見られる。録音資料とアンケート調査が分析資料のほぼ半分を占めていた2017・2018年の結果(洪珉杓,2019)に比べ、データの多様化が進んでいると見ることができるだろう。

さらに、135本の論文から675個のキーワードを取り出してカウントしてみたところ、出現頻度の高い順から「日本語(31回)」「談話(23回)」「対照、韓日、会話(17回)」「ストラテジー(13回)」「多文化(11回)」「発話、敬語、接触場面」となっていた。キーワードの分布から、「韓日対照研究」「日本語研究」という枠組みから「談話、ストラテジー、発話、敬語」という言語項目と「多文化、接触場面」という言語社会的な特徴が見えてくる。

次節以降では、「韓日対照研究」「日本語研究」という枠組みの中で、各言語現象は社会的要因との関わりからどのように研究されてきたか、その動向について概観する⁷⁾。

3.2. 対照研究

(1) 表現・形式の機能及び実態

林始恩(2019)「日本語と韓国語の発話の冒頭における談話標識について—いやと아니(ani)を中心に—」(『日本語文学』80)は、発話冒頭に置かれる談話標識の中でも、韓国語と日本語において、形式が同じ

7) 個別の研究において類似する概念が使用されている場合、以下のように統一して記述する。

- ・ 韓日/日韓 → 「韓日」
- ・ 日本語母語話者 → 「日本人」
- ・ 韓国語母語話者 → 「韓国人」
- ・ 韓国語を母語とする日本語学習者 → 「韓国人日本語学習者」
- ・ ストラテジー/戦略/方略 → 「ストラテジー」

く、似たような機能を持つ「아니(ani)」と「いや」についてその意味と機能について分析した。金楨憲(2020)「韓・日「依頼表現」一考察 - 文末表現を中心に -」(『日本言語文化』50)は、韓日のドラマを資料とし、①授受動詞から派生した文末表現、②授受動詞を使わずに依頼表現の機能を持つ表現、③依頼表現における戦略に焦点を当て、「親疎関係」での文末表現の様相と年齢と地位による「上下関係」での文末表現について分析した。張允娥(2019)「日韓語の日常会話における聞き手の理解表現」(『日本学報』121)は、日韓語の友人同士の日常的な会話の中で聞き手が「理解」表現をどのように用いているかを使用頻度、出現位置、発話様態、相互行為の観点から実証的に分析した。そのうち、「[あいづち+*q*]の使用頻度が高い韓国語は、話し手の発話が内容的にある程度まとまった後に出現しやすい」という特徴を導き出すなど、興味深い結果を提示しており、更なる発展が期待される。

(2) 言語行動の機能及び実態

まず、自然談話を考察対象として分析した研究が多い。吳晁榮(2019)「話題導入と展開における自己開示」(『日本語文学』86)は、初対面場面の会話データを基に、韓国人と日本人との①話題導入の提示方法、②話題の種類及び自己開示の内容、③話題ごとの構造の変化を考察した。張允娥(2020)「한일 동성친구간 일상대화에 있어서의 내러티브 대조연구-내러티브의 산출과 도입을 중심으로-」(『日本語学研究』65)は、韓日の同性間の友人同士の日常会話におけるナラティブの産出様相や導入ストラテジーに、どのような類似点と相違点が見られるかを分析した。

また、アンケート調査を考察の対象とした研究も少なくない。洪珉杓(2019)「유사친족호칭의 사용실태에 대한 한일대조연구」(『日本語学研究』60)は、韓日両国の50歳前後の中年男女を対象に疑似親族呼称の使用実態に対するアンケート調査を行い、その結果を社会言語学的な観点から考察した。待杲啞(2020)「한일 양 언어의 감사와 사죄표현의 선택 매커니즘-대학생의 언어사용 실태조사를 중심으로-」(『日本近代学研究』67)は、アンケート調査を資料とし、韓日の感謝と謝罪表現の選択メカニズムの違いを明らかにした。実態調査からメカニズムの究明へと研究の幅が広まった研究と言える。沖裕子・姜錫祐(2019)「國際調査からみる日韓大学生の依頼談話意識」(『日本語学研究』62)は、韓日の大学生を対象に行った依頼談話に関する調査の結果を示し、そこから韓日の違いを明らかにした。この研究は談話内省法という定性的方法を用いた筆者らの定性的な分析結果を、定量的に検証する結果となり、研究方法論的にも示唆するところが大きく、更なる発展が期待される。

次に、アンケート調査とインタビュー調査など、複数の調査方法による対照研究も見られた。禹基洪(2020)「사회인구학적 속성으로 본 한일 비즈니스 커뮤니케이션 상의 갈등양상에 대한 실증 분석」(『日本語文学』84)は、アンケート調査とインタビュー調査の結果を資料とし、韓国と日本の製造業と金融業で働いているビジネス・パーソンがお互いにコミュニケーションを行う際、感じるコンフリクトの諸相が社会人口学的属性によってどう変わるのかを実証的に検証し、より多角的に分析できるのか、その可能性を探った。이정미(2020)「한일 초등 돌봄교실에서의 언어행동에 대한 대조 고찰 - 돌봄교사와 아동간의 언어행동을 중심으로 -」(『日語日文学』86)は、アンケート調査とインタビュー調査の結果を資料とし、韓国と日本の小学校のドルボム教室(学童クラブ)における教師と児童との間の言語行動を中心に考察した。放課後に児童の保護育成を行う韓国のドルボム教室と日本の学童クラブ、という特定集団における言語行動の違いを分析することにより、ドルボム教室と学童クラブの持つ社会的意味・位相を明確にした。これらは言語学から社会学の方へとより研究の幅を広げたものと見ることができる。

さらに、近年の新たなメディアの発達やコミュニケーション・スタイルの変化に伴い、新たなコミュ

ニケーション形態を反映した対照研究も見られる。張相彦(2019)「한국어와 일본어 화자의 언어행동에 관한 사례연구-카카오톡 메시지의 의뢰와 거절을 중심으로-」(『日本文化研究』69)は、韓日の大学生を対象にして、カカオトークメッセージに見られる言語行動の分析を試みた。「依頼」と「断り」という一連の言語行動が有機的に結び付いているという点に注目しており、生越直樹(2012)と李吉鎔(2017)にも指摘されている、相互作用としての言語行動研究の一つである。

この他、言語行動の機能や実態を分析した研究として、石塚ゆかり(2020)「日韓のロコミ行動における否定的および肯定的評価とその表現について-ホテル予約サイトの分析から」(『日本語学研究』65)や李恩美(2020)「韓日のニュース記事の見出しにおける文末表現の使用様相」(『日本言語文化』51)などが見られた。

(3) ストラテジー

Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論の影響を受け、韓日のストラテジーの実態を記述した対照研究が少なくない。李恩美(2019)「한일양국 대학생 대화에 나타나는 스피치레벨의 운용 - 폴라이트니스(politeness)의 관점에서 -」(『日語日文学研究』110)は、韓日の大学生の会話におけるスピーチレベルの運用をポライトネスの観点から考察し、韓日のスピーチレベルの機能と特徴を明らかにした。元智恩(2019)「日韓のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとネガティブ・ポライトネス・ストラテジーに関する量的および質的分析」(『日本語文学』84)は、韓日のリメイクドラマを資料として、韓日のポライトネス・ストラテジーを分析し、韓日の共通点と相違点を明らかにした。鄭賢兒(2019)「물질적인 피해상황에서의 사회행동의 한일대조 - 상호작용의 특징을 중심으로 -」(『日本語学研究』62)などの一連の研究では、物質的・身体的な被害状況で韓日の男女大学生が、どのような言語ストラテジーを用いて、関係回復のための相互作用を行っているのかを実際の会話データから定性的に分析した。

一方、孫朱彦(2019)「일본과 한국의 치료내용 결정과정에서 사용되는 의사의 언어전략 - 양국의 드라마 자료 대조를 중심으로 -」(『日本語文学』86)などの一連の研究では、韓日の医療ドラマを資料として、医療会話で用いられる医師の言語ストラテジーを考察し、医療場面における韓日の共通点と相違点を明らかにした。孫朱彦氏の一連の研究は、いわゆる「福祉言語学」へと繋がるもので、社会における言語やコミュニケーションの問題を考えるうえで重要な示唆を与えてくれる。

(4) その他

韓国・日本・中国の3国の対照研究もあり、洪珉杓(2020)「한자문화권의 언어적 티부에 관한 사회언어학적 대조 연구」(『日本語学研究』64)や洪珉杓(2020)「언어행동의 금기의식에 대한 한, 중, 일 3국의 사회언어학적 대조연구」(『比較日本学』46)は、漢字文化圏の韓・中・日3国の大学生と一般人1,252人を対象に行った意識調査に基づき、言語的タブーや禁忌意識を計量的に分析した。金鍾完(2019)「한중일 의뢰행동의 담화구조 대조연구 -대화자 사이의 상호행위 실태 분석을 중심으로-」(『日本語文学』81)は、相互行為(interaction)という観点からみた依頼行動の談話ストラテジーに関して、日中韓の対照研究を試みた。沖裕子・姜錫祐・趙華敏(2019)「日韓中対照からみた日本語の談話構築態度 -発想と表現の差を説明するモデルの検討-」(『日本研究』50)は、日本語と韓国語、中国語を分析することによって、談話的異同を説明しうる日中韓それぞれの談話構築態度モデルを提示した。談話構築態度は、談話的発想の根底にあり、それぞれの談話表現の異同や、ひいては社会文化そのものの異同を産む、基本的態度としてあることを分析考察したものである。社会言語学は、個々の研究対象ごとに調査を行い、データを分析するこ

とにより実態を把握する研究の割合が高い中、その実態を理論的に説明しうるモデルの提案を試みている点で極めて示唆に富んでいる。

以上、対照研究の主な動向としては、韓日の実態記述中心の対照研究が引き続き蓄積されたこと、データ資料の多様化・良質化が図られたこと、実態記述中心からメカニズムの究明やモデルの提案が試みられたこと、この三点が注目に値する。

3.3. 国語・中間言語・継承語としての日本語研究

日本語研究における「日本語」は、日本を代表し公の性格を担う「国語としての日本語」、日本語学習者が日本語を習得していく過程で構築した「中間言語としての日本語」、日本語が通用しない言語環境で親から受け継いだ「継承語としての日本語」の三つに分けられる。以下に、各々の研究動向を概観する。

3.3.1 国語としての日本語研究

(1) 表現・形式の機能及び実態

語用論と社会言語学分野の共通の関心分野の一つである「敬語表現」についての考察は、今期も続いていた。まず、語用論の観点からの敬語研究について紹介する。申憲慧(2019)「비경어적 의미를 지닌 경어표현에 대한 화용론적 고찰-적절성 조건에의 적용가능성을 중심으로」(『日本近代學研究』66)は、ドラマ・シナリオを資料として、非敬語表現を取り上げて警告、抗議、非難機能に分類し、適切性条件の観点から考察した。申憲慧(2020)「행위요구발화에서 보이는 정중함의 양상 -「~ていただく」가 사용된 의뢰, 명령의 발화행위를 중심으로-」(『日本学報』123)は、「~ていただく」が使用された依頼・命令発話における丁寧さの実現の在り方について、Leech(1983)の丁寧原則を取り入れて検討した。李芝賢(2020)「특정어휘류에 나타나는 이차적용법의 화용론적 고찰 -담화레벨과의 접점에서-」(『日本語文學』85)は、日本語の副詞や助詞類に現れる二次的用法の語用論的機能について考察した。劉豎眞(2020)「「ていうか」의話용적 분석 -공손성(ポライトネス)을 중심으로-」(『日本語文學』90)は、ドラマ・シナリオを資料とし、語用論的側面でのポライトネス理論を適用し、「ていうか」の特徴を考察した。

次に、社会言語学の観点から敬語の使用実態を探った研究としては、李讓珍(2019)「『国会會議録検索システム』に見られる「お/ご~させていただく」の使用について」(『日本語学研究』60)などの一連の研究、印美東(2020)「公的な場面における「おる」の使用実態について -日本国会會議録の用例を中心に-」(『日本言語文化』51)、魚秀禎(2019)「6つのジャンルにおける尊敬語の種類と語形-『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて-」(『日本語文学』87)などが見られた。

敬語の他に、特定の言語表現・形式の機能・用法・実態について考察した研究も少なくない。李政珉(2020)「日本語母語話者の職場における「という」のバリエーションとその使用状況について」(『日本語教育』93)は、自然談話テキストデータとして、職場での自然会話を録音して文字化した談話資料『合本 女性のことば・男性のことば(職場編)』を資料とし、「という」のバリエーションとその使用状況を明らかにした。林始恩(2019)「応答詞「そうですね」について-WH質問への応答を中心に-」(『日本語学研究』61)は、初対面の自然会話とスポーツ選手のインタビューという2種類の会話データを用いて、WH質問への応答に現れる「そうですね」の相互行為上の働きを分析した。林始恩(2020)「談話標識「え」の機能について」(『日本言語文化』51)は、BTSJによる日本語話し言葉コーパスを資料とし、初対面の話者同士の会話において、談話標識「え」がどのような発話で使われているのか観察し、前後の文脈の中でどの

ような機能を果たしているのか分析した。

さらに、鄭相美・李恩美(2019)「일본어교과서를 통해 본 「ちょっと」의 커뮤니케이션기능-자연대화와의 비교를 통하여-」(『日語日文學研究』111)は、「ちょっと」の機能を大きく語調緩和(断り、依頼・指示、ネガティブな内容の伝達)、注意喚起、非難、フィラーの4つの機能に分けた上で、社会人同士の初対面および大学生同士の会話の録音資料と日本語教科書を分析資料とし、そこに用いられた「ちょっと」の機能を分析した。李恩美・鄭相美(2020)「「みたいだ」의 담화상용법-자연 대화와 일본어교과서 분석을 중심으로-」(『日語日文學研究』111)は、実際の会話における「みたいだ」の使用様相や日本語教科書の取り上げ方を考察した。これらは「自然会話とインタビュー」や「録音資料と日本語テキスト」へと分析資料の多様化の試みが窺われる。

この他、日本語の表現・形式を分析した研究として、崔慧仁・李恩美(2019)「일본인 대학생 대화에 나타난 「思う」의 헛지용법-진소차과 성차에 주목하여-」(『日語日文學研究』108)、小此木江利菜(2020)「依頼談話における言いさし表現「けど」に関する考察-機能と負担度に着目して-」(『日本文化学報』86)、李宰錫(2019)「男性一人称<ボク>と<オレ>のキャラクター属性」(『日語日文學研究』111)などが見られた。

(2) 言語行動の機能及び実態

言語行動の機能・実態についての研究を紹介する。東出朋(2020)「呼びかけ語にみるフィクショナルリティー小説と自然談話における話し言葉の分析」(『日語日文學』87)は、BCCWJと名大コーパス「ひまわり」を資料とし、重ね呼びかけ語という呼びかけ語の形式はフィクションの話し言葉における特徴であることを、小説の会話と自然談話を分析することで示した。張允娥(2020)「日常会話とアニメーション会話における沈黙の機能と役割」(『日本言語文化』50)は、日常会話とアニメーション会話で沈黙がどのような箇所が生じており、沈黙がどのような機能と役割を果たしているかを実証的に検討した。申媛善(2019)「일본어 중도종료형발화의 양면성 연구」(『日本語文学』81)は、初対面の録音資料をデータとし、ボライトネス理論に基づいて日本語の中途終了型発話の特徴を分析した。

盧皇希・張根壽(2019)「『現代用語の基礎知識』을 통해 본 「若者ことば」의 사용양상」(『比較日本学』45)は、『現代用語の基礎知識』における「若者ことば」の2017年と2018年との1年経過視点の使用様相の推移を比較分析した。李善姬(2020)「일본어 온라인 리뷰의 내용과 특성-식당에 관한 부정적리뷰를 대상으로」(『日本近代学研究』70)は、グーグルマップの食堂に関する評価を不満表明の観点から捉え、評価の低い評価の内容と特徴を考察した。金楨憲(2019)「대화상 파워차용 전략에 관한 연구 - 영화, 드라마, 애니메이션에 보이는 표현을 중심으로-」(『日本語教育研究』47)は、映画・ドラマ・アニメを資料とし、コミュニケーション上のパワー借用のストラテジーについて分析した。

社会・文化へ目を向けた研究も見られ、李丹・李恩美(2019)「유어캄언新語・流行語大賞に見られる日本の新語・流行語の社会・文化的な特徴-話題を中心に-」(『日本語学研究』60)は、新語・流行語の「社会・文化的な特徴」を話題を中心に定量的に分析し、社会・文化と言葉の関係の究明を試みた。橋谷萌賀(2020)「日本語のYouTubeコメントに見られる正当化ストラテジー——「フェミニズム」に関する否定的なコメントを例に——」(『日本語教育』93)は、フェミニズムに関するYouTube動画のコメントを正当化の観点から分析し、フェミニズムに対する認識を明らかにすることで、日本社会においてフェミニズムが活発でない理由を探った。フェミニズムに関する研究は散見されるが、言語学の観点からのアプローチは新たな試みである。

(3)その他

孫榮爽(2020)「온라인 멀티미디어 코퍼스 구축 -일본 텔레비전 대담방송을 자료로-」(『日語日文学研究』113)は、「対談番組コーパス」のデータを資料に、オンライン版マルチメディア・コーパスを作成した。日本語の話しことばに関しては、利用できるオンラインコーパスが極めて少ない中、コンピュータで処理可能な言語実例の集合を意味するコーパスは、ある言語項目が、いつどのような場面で使われたかなど、その使用実態を調べられることから、言語研究及び教育において有用な手段になりうる。金嘯泳(2020)「텍스트마이닝기법을 활용한 일본미디어의 한국뉴스의 감정추이에 대한 분석 - 파이썬을 활용한 단어감정극성대응표 분석기법의 수행을 통해-」(『日本語学研究』65)は、大規模のテキストデータ(コーパス)を独自に構築し、これに対するテキストマイニングの分析を行った。金嘯泳(2020)「現代日本語の「打ち言葉」の定義と特徴-「Twitter」のクロールによる「打ち言葉」の分析と共に-」(『比較日本学』49)は、日本で約4千5百万人が利用している代表的なSNSの一つである「ツイッター」における「打ち言葉」関連データをクロールして通時的に考察を行い、「話し言葉」と「書き言葉」と異なる「打ち言葉」の用法とその特徴を明らかにした。

さらに、中村有里(2019)「土産菓子の商品名における横浜の文字表記-地名の文字表記に投影されたローカル・アイデンティティ-」(『日本語学研究』62)、尹祥漢(2019)「의약품패키지에 나타난 위상적 표기전략」(『日本語文学』81)、李賢貞・李舜炯(2020)「言語景觀にみる「エントランス言葉」のストラテジー-福岡市を事例として-」(『日本語文学』90)、などのように表記・言語景觀に関する研究も見られた。

以上、国語としての日本語研究の主な動向としては、機能・実態記述中心の研究が引き続き蓄積されたこと、データ資料の多様化・良質化が図られたこと、コーパス構築が試みられたこと、この三点が注目に値する。

3.3.2 中間言語としての日本語研究

(1)中間言語の実態

韓国人日本語学習者が第二言語として習得して使用する日本語を分析し、中間言語として特徴やその使用実態を記述しようとする研究が多い。金宣伶(2019)「일본 비즈니스 관련 어휘 습득 연구 -한국인일본 어학습자를 대상으로-」(『日本文化学報』80)は、韓国人日本語学習者の学習レベルによる日本ビジネス関連語彙の習得様相を考察した。学習レベル別の語彙テスト資料に基づき、韓国人日本語学習者のビジネス関連語彙の習得は日本語学習が進んでいてもあまり習得されていないことを明らかにし、今後の学習の必要性を求めている。安芝恩(2020)「JSL学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用様相-回顧的アンケート調査の分析から-」(『日本語学研究』63)は、コミュニケーション・ストラテジーの使用に、韓国人日本語学習者の日本滞在期間、日本語学習期間、日本語レベルの自己評価、JLPTレベルが影響していることを明らかにした。

これらは韓国人日本語学習者の中間言語の実態を調査して分析したものと言えるが、韓国人日本語学習者の中間言語的特徴を明らかにするため、日本人の言語使用の実態をベースラインデータとして比較分析した研究も見られた。一色舞子(2019)「日本語母語話者と韓国人日本語学習者による終助詞「よ」の使用実態-談話完成テストの調査結果に基づいて」(『日本近代学』64)は、日本人と韓国人日本語学習者を対象に、日本語の終助詞「よ」が使用され得る場面を設定した談話完成テストを行い、日本語教育の場で「よ」を効果的に提示する上で意識化すべき要点について検討した。長島倫子(2020)「日韓接触場面における緩和表現の使用様相 -発話機能との関連を中心に-」(『日本語教育研究』53)は、韓国人と

日本人が相手の言語で書いた作文を推敲する際の接触場面の会話に現れた韓日の緩和表現の用い方を発話機能と関連付けて比較・分析することによって、緩和表現の使用における韓日の共通点と相違点を明らかにした。

梁乃允・李吉鎔(2019)「韓国人学習者の普通体の話しことばにおけるノダ―丁寧体の話しことばとの比較を中心に―」(『日本研究』51)は、主な分析資料として、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室のSSコーパス・バージョン1.0の考え方を参考にして収集された、韓国人日本語学習者4名のカジュアルな談話(全10談話:計388分)を採用し、普通体の話し言葉におけるノダの使用実態を分析した。これに、SSコーパスを用いて韓国人日本語学習者の普通体の話しことばにおけるノダの使用実態について分析を行い、韓国人日本語学習者の丁寧体の話しことばにおけるノダの使用実態および日本語母語話者の普通体の話しことばにおけるノダの使用実態と、それぞれ比較しながら考察した。その結果、韓国人日本語学習者は同じ話しことばでも普通体より丁寧体においてノダを優勢に用いることが明らかになった。

上級日本語学習者のライティング能力を捉えた研究として、金施恩(2019a,b,2020)「일본어 상급 학습자의 복합어 운용 실태 연구-모어화자와의 비교를 통하여-」(『日本語教育研究』47)、「일본어 상급 학습자와 모어화자의 작문 어휘 비교-단어의 공통도를 중심으로-」(『日本語学研究』61)「일본어상급학습자의 조건표현 운용실태연구-모어화자와의 작문 비교를 통하여-」(『日本語教育研究』50)が見られる。金施恩氏の一連の研究は伊集院郁子(2011)の公開意見文データベースを分析資料とし、上級日本語学習者の作文の問題点を多様な側面から分析し、上級日本語学習者のライティング能力を高めるための学習方向を示唆している。

最後に、社会言語学研究成果を日本語教育の現場へと活用した研究も目立つ。李舜炯(2019)「大学の通常の日本語授業におけるPBL型言語景観調査の導入と学習者評価」(『日本語教育研究』48)は、「日本語彙論」という大学の通常授業の中にPBL型言語景観調査を導入し、授業で学習した内容理解の深化や教育的リソースとしてのPBL型言語景観調査の有効性について学習者評価を基に論じた。郭銀心(2019)「キャラ語尾の日韓翻訳に関する一考察 - 韓国人日本語学習者の翻訳結果を中心に-」(『日語日文学研究』109)は、日本アニメに出現するキャラ語尾を韓国人日本語学習者が韓国語に翻訳した様相と学習レベルとの関わりについて興味深い考察を行っている。盧姪鉉(2019)「韓日言語行動に関する研究成果の教育的活用への試み-異文化理解教育で使える「行動の分析方法」の提案-」(『比較日本学』46)は、韓日の言語行動に関する社会言語学的成果の教育的活用への試みとして行った授業の実践事例を報告し、異文化理解教育で使える「行動の分析方法」を提案した。

この他、中間言語としての日本語の実態を分析した研究として、吳晔榮(2020)「初対面場面における自己開示に関する意識調査 - 韓国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に -」(『日語日文学研究』112)、全鐘美(2019)「対人関係の構築における否定的評価の出現-日本語母語話者と韓国人留学生の会話を対象に-」(『日本語文学』84)、朴成泰(2019)「日本語と韓国語のフィラーの機能に関する研究-接触場面に着目して」(『日本語文学』82)などが見られた。

(2) 中間言語に対する評価 [韓日接触場面における日本人の行動意識]

上記のように、中間言語研究は話し手を中心に行われているが、聞き手を研究の範囲に入れ調査分析を進めた研究も見られた。まず、学習者言語に対する評価の観点を取り入れた研究を紹介する。李吉鎔(2020)「学習者言語の配慮的側面についての評価」(『日本研究』52)は、韓国人日本語学習者の談話資料

を用い、4名の日本語母語話者(日本語教育専門家)と15名の韓国人日本語学習者に配慮的コミュニケーションの度合いを評価してもらった。話し相手の日本人教師の判断をもとに、3つのグループに分けられた学習者談話の各グループから円滑なコミュニケーションを行っている学習者談話(高評価談話)と、そうではない学習者談話(比較談話)を取り上げ、比較検討した。日本語教育専門家の他者評価と、日本語を学ぶ学生たちの自己評価の間の異同について考察することによって、学習者言語における配慮的コミュニケーションの実態をより鮮明なものにした。

韓日接触場面における日本人の行動、いわゆる、フォリナー・トーク使用者の行動意識を分析した研究もある。權恩熙(2019)「非対面型接触場面におけるフォリナー・トークの使用様相に関する考察-相手外国人の日本語レベルによる相違に注目して-」(『日語日文学研究』110)は、日常生活で生じる非対面型接触場面に注目し、フォリナー・トークの使用様相を明らかにした。永田沙織(2020)「日韓接触場面における日本語非母語話者の不理解表明に対する日本語母語話者の調整行動:会話参加者間の親疎関係に着目して」(『日本語教育研究』52)は、韓日接触場面において、韓国人から不理解が表明された際に日本人がとった調整行動を、会話参加者間の親疎関係に着目して考察した。鄭榮美(2019)「일본어 비즈니스 이메일의 대화구조와 대인배려표현에 관한 고찰」(『日本語学研究』59)は、鉄鋼関連会社に勤めている韓国人と日本人との間でやり取りされたメールの中で、日本人の作成したもののみを分析対象に、電子メールの談話構造と対人配慮表現を考察した。李舜燁(2020)「ICTを活用した遠隔接触場面における日本語学習者と母語話者の聞き手言語行動」(『日本語学研究』64)は、対面接触場面か遠隔接触場面かによって韓国人日本語学習者と日本人の聞き手行動に相違のあることを明らかにした。

(3)中間言語の生涯

第二言語の習得研究を、習得から維持、摩滅、喪失、再構成へと研究の幅を広げた研究もあり、黃永熙(2020)「일본어 조건표현의 문치말에 관한 종단적 연구: 제2언어의 습득에서 마멸까지」(『日本語教育研究』51)は、日本語条件表現が含まれた表現の習得から維持、摩滅までの構造を分析した。黃永熙(2020)「韓国人における日本語終助詞の習得と喪失-帰国生日本語と植民地日本語の比較」(『比較日本学』48)は、日本語終助詞の喪失段階に見られる変化、接触度による使用頻度などを分析した。黃永熙(2019a,b)「일본어 아스펙트 표현의 습득, 유지, 마멸, 상실 그리고 재구성」(『日本語学研究』59)や「일본어 어휘능력의 종단적 변화에 관한 계량적 고찰」(『日本語教育研究』48)は、日本語アスペクト表現や語彙能力の習得から維持、摩滅、喪失、再構成までのプロセスを考察した。黃永熙氏の一連の研究は「幼児期の日本生活を通して日本語を習得し、帰国後もその日本語を維持している二人の韓国人帰国生の日本語」という貴重なデータを綿密に分析している。第二言語の習得研究は、習得から維持、摩滅、喪失、再構成へと研究の幅が広まったと言える。

以上、中間言語としての日本語研究の主な動向としては、中間言語の実態記述中心の研究が引き続き蓄積されたこと、韓日接触場面における日本人の評価や行動意識を視野にいれた研究が試みられたこと、習得から維持、摩滅、喪失、再構成へのプロセス研究が続いていること、この三点が取り上げられる。

3.3.3 継承語としての日本語研究 [二言語使用・言語接触研究]

(1)継承日本語

韓国に在住している韓日多文化家庭の子供に継承する日本語教育についての研究を紹介する。朴世稀

(2020)「한일국제결혼가정 청소년의 계승어 사용에 관한 개별성연구」(『日本語教育研究』50)は、韓日国際結婚家庭の青少年(5名)を対象にインタビュー調査を行い、継承語使用意識について質的分析を行った。朱晔淑(2019)「한일 국제결혼가정 자녀의 언어운용능력-한국어와 일본어의 관계를 중심으로-」(『日本語文庫』80)は、韓日多文化家庭の子供の言語運用能力を調査分析し、日本語と韓国語との言語能力に相互依存関係が成立することを明らかにした。朱晔淑(2020)「다문화가정 자녀의 읽기능력-한·일 이중언어 관계를 중심으로-」(『日本文化研究』76)は、小中学生の多文化子女のリーディング能力を調査し、日本語のリーディング能力と韓国語のリーディング能力は正の関係にあることを明らかにした。金惠敏(2019)「談話データを用いた韓日バイリンガル児童の言語使用の事例研究」(『日本言語文化』47)や金惠敏(2019)「사례 연구: 한일 이중언어 사용 아동의 코드 스위칭의 화용론적 기능」(『日本研究』80)は、一人の韓日多文化家庭の児童の自然談話を録音し、そのデータから得られた結果を先行研究と比較分析することによって、韓日多文化家庭子女の言語使用の実態の解明を試みた。

川口慶子(2019,2020)「継承日本語における連体修飾節の習得について-L1・L2との比較を通して-」(『日本語学研究』60)や「継承日本語における「のに」の習得について: L2学習者との比較を通して」(『日本語教育研究』51)は、継承語環境にいる韓日子女を対象に行った『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA(Dialogic Language Assessment)』の測定で得られた日本語での発話データを主な分析資料とした。そこから得られた「連体修飾節」や接続助詞「のに」の習得様相を、韓国語、英語、中国語を母語とするL2学習者の習得様相と比較することで、継承日本語の習得様相を明らかにした。

盧姪鉉(2020)「Project for Creating Bilingual Environments Viewed from the Perspective of Japanese Language Education for the Children from Korean-Japanese Multicultural Families: Focusing on the Program of the Multicultural Families Support Center in Dobong-gu」(『日本学報』124)は、公共機関・施設における継承語教育に目を向け、その実態と改善策を提案した。邢鎮義(2020)「한국과 일본의 언어권(言語権)의 관점에서 본 다문화주의-캐나다의 사례와 비교하여-」(『日本文化学報』86)は、多文化社会における先駆的な政策を取ってきたカナダの事例検討に基づき、韓国と日本の言語権という観点から多文化主義について論じ、公教育システムの中での継承語教育を望ましい方向として提案している。

(2) 二言語使用

継承語としての日本語研究は、在韓日本人の二言語使用・意識へと研究の幅が広がっていく。朴良順(2020)「일본인 국제결혼 여성의 2언어사용의 특징-체류기간의 차이를 중심으로-」(『日本語教育』91)や朴良順(2020)「재한일본인여성의 언어환경의 비교」(『日語日文学研究』113)は、韓国人と結婚した在韓日本人女性の二言語使用の状況とその特徴を分析した。松樹亮子(2020)「在韓日本人の韓国文化の受容意識と行動選択に関する一考察-インタビュー調査から-」(『日本文化学報』85)は、インタビュー調査に基づき、在韓日本人が韓国文化を受容し適応していく際に、どのような意識を持ち行動しているのかということを調べている。そのうち、留学生は自身の信念に合わない異文化行動に対しては適応をしないことを積極的に選択している傾向があるのに対し、社会人は意識面では多少マイナスに受け止めていても異文化行動を選択する消極的容認の姿勢を見せる傾向があるということが確認できた。なお、言語的マイノリティに対する言語政策研究も見られ、한아름·이충호(2019)「쉬운 일본어와 다문화공생을 위한 '쉬운 한국어'의 가능성」(『比較日本学』45)は、「やさしい日本語」を参考にして多文化共生のための「やさしい韓国語」の可能性を探った。

継承語としての日本語研究は移住した人たちの言語生活や意識へと研究の幅が広がっていく。伊藤浩子・朴信奎(2020)「카타리베 활동을 통한 식민체험의 기억계승 -재일한인 1세·2세의 기억의 전달 차이를 중심으로-」(『比較日本学』48)では、戦争と植民経験を伝達し在日韓国人の語り部活動をした在日韓国人1世と2世の事例を分析した結果、語り部活動は地域社会の社会文化的行為として戦争経験と知られていない在日韓国人の歴史と記憶の伝承という役割を担っていることが確認できた。俵木はるみ(2019a,b)「在日コリアンの人権とヘイトスピーチに関する一考察 -在日コリアンへの聞き取り調査をもとに-」(『日本語教育』89)や「ヘイトスピーチの害悪への一考察 -マイノリティの在日コリアンの観点から-」(『日本言語文化』48)のように、より社会の方へ研究の幅を広げたものも見られた。

(3)言語接触

継承語としての日本語研究は言語接触へと繋がる。まずは、韓国の中の日本語という立場からの研究を紹介する。이덕배・정보희(2019)「30·40대 한국인의 언어생활 속 일본식 외래어 - 사용실태와 인식을 중심으로 -」(『日本語教育』88)などの一連の研究は、韓国人の言語生活に残されている日本式外来語の使用実態と認識を年齢層別に分析した。梁敏鎬(2019)「수산물 명칭 속에 나타난 잔존일본어에 관한 연구」(『日本文化学報』82)は、韓国国立国語院の民族生活語調査のデータを活用して分析し、様々な日本語の残存形態が韓国の水産物の名称の中に残されていることを明らかにした。李慈鎬(2020)「대학 주변의 언어경관-韓・日語를 혼용한 음식점명을 중심으로-」(『日本語学研究』66)は、韓国の大学周辺の日本関連飲食店のネーミング法について研究した。金楨憲(2020)「언어경관에서 관찰되는 일본어 사용실태 조사-서울 명동지역의 일본어사용 간판을 중심으로-」(『日本近代学研究』69)は、ソウル明洞地域の日本語使用看板を資料とし、言語景観における日本語の使用実態を調査分析した。

日本の中の韓国語という立場からの言語接触研究もあり、孫美貞・李承珉(2020)「쓰시마의 한국어 언어경관에 관한 경년연구」(『日語日文学』86)は、2017年と2019年、2回に渡る経年調査によって津島の韓国語の言語景観の変化を探った。なお、李舜炯・李賢貞(2020)「言語接触からみた日韓隣接地域の言語景観」(『日本語学研究』66)は、日韓隣接地域の言語景観を分析することによって言語接触の類型を確認した。

この他、梁敏鎬(2019)「언어전파로 살펴본 해역언어학적 어휘 연구-한국의 박래어와 일본 진출 외행어를 중심으로-」(『日語日文学研究』110)などの一連の研究は、社会言語学の幅を広げ、言語接触を言語地理学や言語交流及び伝播という側面から捉えたものとして位置づけられよう。

以上、継承語としての日本語研究の主な動向としては、継承日本語の使用能力・意識・継承日本語教育に対する実態調査が図られたこと、在韓日本人の二言語使用・意識から言語政策・言語活動・言語接触へと実態調査研究の幅が広げられたこと、この二点が注目に値する。

4. 終わりに

本稿では、2019年から2020年にかけて韓国国内で発表された研究論文を中心に、日本語学における語用論・社会言語学の研究動向について概観した。紙面の都合により、全体的に大まかな紹介に留まっており、所々割愛した論文も少なくないが、この点はご容赦願いたい。

本稿の分析結果をまとめると、韓日対照研究、国語・中間言語としての日本語研究は、分析資料の多様化・良質化が図られ、機能や実態記述中心の研究成果が引き続き蓄積された。また、韓日対照研究においてメカニズムの究明やモデルの提案が試みられたこと、国語としての日本語研究においてコーパス構築が試みられたことは注目に値する。なお、継承語としての日本語研究は、継承日本語の使用能力・意識・継承日本語教育に対する実態調査が図られ、在韓日本人の二言語使用・意識から言語政策・言語活動・言語接触へと実態調査研究の幅が広がられたと言える。

要するに、語用論・社会言語学的研究は多くの研究者により、分析資料の多様化・良質化が図られ、研究対象が広げられ、その実態の記述成果が蓄積され、社会との関わりから各言語現象の具体的な姿が明らかになりつつある。だが、生越直樹(2012)や李吉鎔(2017)にも指摘されている相互作用としての言語行動研究、実態記述中心の研究から要因分析中心の研究への移行、実態調査からメカニズム・モデル構築への発展は、2019・2020年においても未だに課題として残されている。今後の研究を期待してやまない。

【参考文献】

- 이강민(2020) 「한국 일본어 연구 -동향과 과제-」 『일본연구논총』 현대일본학회 pp.254-272
- 李吉鎔(2017) 「語用論・社会言語学研究の現状と展望」 『日本語学研究』 51 韓国日本語学会 pp.41-56
- 洪珉杓(2019) 「語用論・社会言語学研究の現状と展望」 『日本語学研究』 59 韓国日本語学会 pp.67-82
- 内田聖二・宋南先・中達俊明・田中圭子訳(2000) 『関連性理論—伝達と認知』 研究社出版 第二版[Deirdre Wilson・Dan Sperber(1986)、Relevance, Communication and Cognition、Blackwell]
- 生越直樹(2012) 「言語行動の日韓対照研究—その成果と問題点—」 『韓国語教育論講座 第2巻』 くろしお出版 pp.571~586.
- 岡崎敏雄(1998) 「日本語教育通信 日本語・日本語教育を研究する 【第8回】 第二言語習得研究と日本語教育研究 - ことばの習得研究：目的・領域・方法 - 」 国際交流基金ホームページ [http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/index.html] pp.14-15
- 清塚邦彦訳(1998) 『論理と会話』 勁草書房[Herbert Paul Grice(1989)、Studies in the Way of Words, HUP]
- 坂本百大訳(1978) 『言語と行為』、大修館書店 [John Langshaw Austin(1962) How to Do Things with Words、Harvard University Press]
- 坂本百大・土屋俊訳(1986) 『言語行為——言語哲学への試論』 勁草書房[John Rogers Searle(1969)、Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language]
- 真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹(1992) 『社会言語学』 おうふう
- 真田信治編(2007) 『社会言語学の展望』 くろしお出版
- 田中春美・田中幸子 『よくわかる社会言語学』 ミネルヴァ書房
- 高木千恵(2016) 「社会言語・言語生活」 『日本語の研究』 12-3 日本語学会 pp.91-98
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子(2011) 『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する』 大修館
- 河正一(2019) 「社会言語学的調査の状況—言語行動に関する日韓対照研究を中心に—」 『計量国語学』 31-8 pp.572-588

〈요지〉

화용론·사회언어학 연구의 현황과 전망 - 2019·2020년 한국내 연구논문을 중심으로 -

본고에서는 2019·2020년 한국에서 발표된 연구논문을 중심으로 화용론·사회언어학 연구의 동향을 살펴보았다. 결과를 정리하면 다음과 같다.

- (1) 한일대조연구, 국어·중간언어로서의 일본어연구는 분석자료의 다양화·양질화를 도모하였고, 기능과 실태기술중심의 연구성과가 지속적으로 축적되었다.
- (2) 한일대조연구 분야에서 메커니즘 규명과 모델 제안이 이루어진 점, 국어로서의 일본어연구 분야에서 코퍼스구축이 시행된 점은 눈에 띄는 성과라고 볼 수 있다.
- (3) 계승어로서의 일본어교육은 계승일본어의 사용능력·의식·계승일본어교육에 관한 실태조사가 실시되었고, 재한일본인의 이중언어사용·의식에서부터 언어정책·언어활동·언어접촉으로 실태조사연구의 폭이 넓어졌다고 할 수 있다.

근래 화용론·사회언어학 분야의 연구는 분석자료의 다양화·양질화를 도모하고, 연구대상을 확대하여, 실태기술성과를 지속적으로 축적함으로써, 사회와의 연관 속에서 각 언어현상의 구체적인 모습을 밝히고 있다. 하지만, 生越直樹(2012)와李吉鎔(2017) 등에서도 지적한 바와 같이, 상호작용으로서의 언어행동연구, 요인분석중심연구, 메커니즘 규명 및 모델 구축 관련 연구 성과가 적은 것은 아쉬움으로 남는다. 향후 연구를 기대해 본다.

논문분야: 화용론·사회언어학

키워드: 화용론, 사회언어학, 대조연구, 일본어, 중간언어, 계승어

■ 노주현(盧柱鉉)

덕성여자대학교 부교수

chel99@hanmail.net

■ 投稿日 : 2021년	1월	11일
■ 審査開始 : 2021년	1월	18일
■ 審査完了 : 2021년	1월	29일
■ 掲載確定 : 2021년	2월	15일